中国・内モンゴル地域における民族教育に関する人類学的研究

阿　拉　塔

赤峰学院教育科学学院

Anthropological Study of Ethnicity and Education in Inner Mongolian Area, China

ALATA

Education Science College, Chifeng University

本論文は，多民族国家中国の少数民族地域における民族教育の現場である学校教育の現状と課題に関する人類学的研究の試みである。その主目的は，第一に，少数民族地域における学校教育の現場を民族誌的に詳細に記述すること，第二に，学校教育とその周辺の社会的背景が，当該少数民族の「民族」としての自己認識と，民族文化の動態にどのように影響しているかを明らかにすること，第三に，多民族国家における少数民族文化の動態に新たな知見を提示することである。

対象地域は，内モンゴル自治区・アラシャン盟で，2008 年から 2010 年にかけて，断続的に現地調査を実施した。本論文における「民族教育」とは，「民族」としての自己認識，即ち民族帰属意識の形成を促し，民族文化を次世代に継承するための文化化の手段，あるいは脈略として位置付ける。従って，寺院教育，家庭教育も含まれる。但し，現状では学校教育が重要な文化化の場であり，その現場は，国家の教育方針の統制下にあり，漢語教育も含まれる。

本論文では，筆者は一人のネイティブ人類学を志す者として民族教育の現場である民族学校を体系的に捉えながら，民族誌的に描き，民族教育に参画する人々の営みを当事者の思考，及び価値観に沿って解釈を加える。採用した研究方法は，研究課題に関する日本語，中国語，モンゴル語による先行研究の批判的評価，対象地域における参与観察による民族誌的データの分析による綜合的考察である。

本論文は，十章より構成される。第一章では，序論として本論文の理論的枠組みと学術的位置付けについて提示した。第二章では，先行研究に対して批判的評価を加え，本論文の射程を明示した。既存の中国・少数民族地域における民族教育研究に関しては，その二重性理論が問題とされてきた。民族教育の二重性とは，国民教育制度としての性格，及び民族文化の継承を目指した当該民族自らの教育制度としての性格という二面性を有することを指す。本論文では，同理論が理念的なものであることを確認した上で，民族教育の現場で収集した民族誌的データとその分析を基盤に，関係者がどのような思考，及び価値観に沿って，学生に対する教育活動に臨んでいるかを中心的課題として設定している。

第三章では，学校教育がモンゴル地域に浸透する以前の寺院教育と家庭教育の役割を考慮し，両教育形式の変遷に関して考察を加えた。その結

果，かつて家庭教育は，主にモンゴル語（会話），躾･礼儀を，寺院教育は，主にモンゴル語（文字），チベット語，数学，医学といった知識を次世代に伝承してきたが，新中国成立に伴い，寺院教育の役割が希薄化し，他方，かつて大部分が遊牧生活を営んでいた状況が，生活空間の多様化と漢語の浸透に伴い，現在，モンゴル文化を次世代に継承していくための文化化の場として，事実上，制度的に機能しているのは民族学校であることが明らかになった。筆者が学校教育に注目した意図もそこにある。

第四章では，内モンゴル自治区全体における学校教育を中心とする民族教育の変遷，第五章では，主たる調査対象地域であるアラシャン盟における民族教育の変遷に関して考察した。アラシャン盟は，内モンゴル自治区の中で，歴史的，かつ文化的に特異的な地域で，民族教育研究の必要性が求められている。本論文が同地域を調査対象とすることで，その民族誌的記述の充実に貢献することを期待した。第六章では，調査対象学校であるアラシャン左旗モンゴル第二実験小学校，及びアラシャン盟民族完全中学（中・高一貫）校について概観した。

第七章，第八章，第九章は，上記２学校におけるフィールドワークに基づく考察である。その際，民族教育関係者が，教育活動である授業運営を通じてどのようなモンゴル人像の形成を期待しているかという切り口から，全体的なカリキュラムの確認を前提に，特に (1) 民族教育関係の授業科目，(2) 同教科書編集，(3) 同授業実態に着目して考察を行った。着目した授業科目とは，「言語教育」である『モンゴル語』と，2003 年から新設された「文化教育」である『モンゴル民族風俗･習慣』と『第二課堂活動』である。具体的には，教科書（実技科目である『第二課堂活動』には教科書と試験は存在しない）分析，授業への参与観察，試験内容の解析，担当教師へのインタビューなどから考察を行った。その考察結果は以下の通りである。

「言語教育」を通じて教育者側が学生に期待するモンゴル人像とは，モンゴル語能力（文法・正書法・文章作成能力など）に優れ，モンゴル文化に関する基本的知識を習得したモンゴル人であり，特に前者に重点が置かれていることは確かである。但し，同教科書分析によれば，課題として扱われている中心は「故郷」への思慕，「動物・植物」に関する知恵などであり，教科書編集者側のモンゴル文化観が暗示されている。また教師自身も，授業運営においてモンゴル文化に関する内容を盛り込む努力をしている。その構図は，教育者のモンゴル文字文化に対する重要視を反映しており，モンゴル人としての民族帰属意識の構築という文化化の手段，あるいは脈絡としての高い評価を表しているといえるのである。この文字文化に対する高い評価は，校舎の外見にも表象されている。建物の上，廊下，教室，構内の壁などに書かれているモンゴル文字には，日常的に学生の視覚を刺激し，学生の民族帰属意識の形成に貢献することを期待する教育者の思考がうかがえるのである。

「文化教育」の『モンゴル民族風俗・習慣』という授業科目の設置は，中国の教材改革という国家レベルの政策に起因する。この政策で，小学校側が学校の現状を踏まえて，独自の教材を作ることが奨励されたのである。同授業科目の設置と同教科書の編纂は，「民族学校で行われている全国統一の教科書の中で，モンゴル民族の歴史，文化などを扱う授業科目の少なさ」を直接的な動機としているが，上述のように「言語教育」の『モンゴル語』にも多様なモンゴル文化に関する内容が含まれていることを考慮すれば，「言語教育」だけでは教育効果が表れにくいと思われるモンゴル文化に関する内容を，授業科目として独立させ，その文化化の手段，あるいは脈絡としての役割に期待した学生たちを取り巻く現状に関する認識がうかがえるのである。筆者が小学校に通っていた頃の 1990 年代には「文化教育」は存在しなかった。近年，周辺地域の都市化の影響により，モンゴル人の生活拠点が遊牧地から都市部に移り，生活様式の多様化が現実のものとなっている。こういった状況判断から，次世代にモンゴル文化を「知識」として勉強させることを意図して「文化教育」という授業科目が新設されたと考えられるのである。一方，『第二課堂活動』は，全国共通科目で，授業内容は各学校独自に行われている。

以上の考察から，民族教育の現場において教育者が学生に期待しているのは，モンゴル語能力，平行して知識としてのモンゴル文化，可能ならば技能としてのモンゴル文化をも習得したモンゴル人像であることが明らかになった。民族教育の授業科目としては前者が先行し，それを補う形で後者が新設されたのである。

但し，「言語教育」「文化教育」双方の教科書に含まれているモンゴル文化の内容は，モンゴル文化全体の中から，何らかの基準に従って選択され編集されたモンゴル文化なのである。筆者は，結果として盛り込まれた内容がどのような過程を経て，選択・編集されているのかを再検討する必要があると考え，さらに考察を加えた。その結果，「言語教育」の『モンゴル語』に関して，『モンゴル語課程標準』の制定，モンゴル語教科書の編纂，教師の実践という三段階により選択・編集が行われている。「文化教育」の『モンゴル民族風俗・習慣』に関して，国家全体の素質教育改革，教科書の編纂，教師の実践という三段階を経て，選択・編集が行われていることが明らかになった。このようなモンゴル文化の選択・編集過程において，関係者間で文化の真正性が問われることは必然的であり，教育者側の学生への期待を背負った「部分的真実」としてのモンゴル文化が継承されようとしているのが民族教育の現場の構図なのである。

第十章は，綜合的考察と結論である。本論文で明らかにしたのは以下の三点である。

第一に，少数民族地域における学校教育の現場では，教育関係者が当該「民族」の自己認識の構築に制度的に取り込んでいること。その背景には，新中国成立，都市化による地域間格差を主たる要因として，かつて「民族」の自己認識の構築に貢献していた寺院教育，家庭教育がその役割を希薄化し，学校教育が近代化の流れの中でより重要な場となってきたという脈略がある。

第二に，学校教育の場における当該民族文化に接する機会において，文字文化の役割が重要であることを再認識し，関係者もその点を意識して，「言語教育」という科目範疇で文化化の教育活動に従事していることである。他方，物質文化，生活様相などに関する教育は，「文化教育」という新たな科目範疇として前者を補充する意味で実施されている。

第三に，中国の少数民族地域における民族教育という脈略において「言語教育」と「文化教育」の教科書の内容は，一見，中立的に，民族文化を収集したようにみえる。しかし，実際は，少数民族のある特定の文化がある特定の基準により選択・編集されたものである。多民族国家中国における民族文化研究は，主たる文化化の手段，あるいは脈絡となっている民族学校を中心とした民族教育の現場から問われ続けられなければならないのである。次世代の民族帰属意識の行方も，当該文化の特異性と歴史性を十分考慮しながら注視していかなければならない。それがネイティブ人類学者を志す者の大切な責務だとも考える。